

日本地衣学会

No.27

ニュースレター

Newsletter from the Japanese Society for Lichenology

目次	ニュース.....	93
	会長選挙結果ならびに次期役員について / 庶務幹事.....	93
	名誉会員のプロフィール / 庶務幹事.....	93
	会務報告.....	94
	第5回青空地衣教室(北海道愛山溪)の記録 / 原 光二郎.....	94

ニュース News and Announcements

会長選挙結果ならびに次期役員について

9月末日締切の次期会長選挙結果を会員の皆様にご報告します(敬称略)。締切の後、選挙立会人である藤原、嵯峨、武田の立ち会いのもとで原選挙管理委員長が開票しました。開票の結果、吉村候補者が満票(投票総数31票、無効票なし)を獲得され、吉村候補者が次期会長に選出されました。

また、吉村次期会長から庶務幹事に山本好和、会計幹事に小峰正史、編集委員長に原田浩(いずれも留任)が指名されましたのでご報告します。なお、次期評議員選挙は11月上旬投票用紙配布、11月末日投票締切の予定です。

(山本好和：庶務幹事)

名誉会員のプロフィール

第2回大会で初めての日本人名誉会員として生駒義篤氏と吉岡一郎氏が選出された(ニュースレター23号)。名誉会員推薦書を元にお二方のプロフィールを皆様に紹介するとともに、その業績を讃えたいと思う。

生駒義篤氏は、御尊父生駒義博氏とともに父子二代にわたって、大正、昭和、平成と日本の地衣学の発展に貢献された。生駒氏は、1957年に「日本産葉状及び

灌木状地衣目録」を出版され、当時の地衣類研究者の研究推進に大いに役立つものであった。さらに、後年文献を追加され「Macrolichens of Japan and Adjacent Regions」を出版された。今回、生駒氏は年来の資料を整理され、日本の地衣学を勉強する後進のために「日本地衣学詳史」「日本産地衣目録」「日本地衣学文献集」の三部作を完成され、自費出版された。なお、生駒氏は

現在ではとても手に入れたい安田篤著「日本産地衣類図説」を復刻出版されたのをはじめ、今回日本の地衣類研究上の歴史的著作の幾つかを復刻出版された(詳細は「Lichenology」1巻2号参照)。今回、生駒氏のご厚意により三部作を本会事務局でお預かりし、会員の皆様に安価(送料込みで1万円)に頒布できることになりました。入手ご希望の方は、本会事務局までご連絡下さい。

吉岡一郎氏は、昭和9年より東京大学薬学部において故朝比奈泰彦先生に師事され、以後半世紀にわたり、地衣成分研究を推進され、戦後の日本の地衣学の発展に貢献された。吉岡氏は、東京大学から大阪大学に移り、大阪大学薬学部生薬学講座教授として、故朝比奈先生の研究を継続して地衣成分研究精進され、朝比奈先生とともに日本における地衣成分研究の成果を世界に知らしめ、世界の地衣学をリードした。ちなみに、阪大・吉岡研究

室によって単離構造決定された地衣成分には、地衣テルペン(ロイコチリン、イソロイコチリン、ロイコチリン酸メチル、イソロイコチリン酸メチル、ゼオリン、ジアセチルピキシノール、ピキシニン酸)、デブシドーン(パンナリン、カロプロイシン、メネガチン酸、ピットリン酸、オキシフィソッド酸、コンスチクチン酸、ピカニシン)、キサントン(アントテイン=セカロン酸A)、アントラキノン(2-クロロエモジン、2,4-ジクロロエモジン)、アンスロン(2-クロロエモジンアンスロン、2,4-ジクロロエモジンアンスロン、フラボオプスクリンA, B1, B2)など20を超え、国内では朝比奈研究室に次ぐ。

(山本好和：庶務幹事)

会務報告 Reports of the JSL Activities

第5回青空地衣教室(北海道愛山溪)の記録

第5回目の青空地衣教室は、9月24日から26日にかけて、北海道愛山溪(上川郡上川町)で行われた。愛山溪は、大雪山系の北西に位置し、石狩川支流のポアンタロマ川の上流にある。

初日の24日は、各自移動しての合流日であったが、この日の天候は、まさに青空地衣教室にふさわしい秋晴れであった。秋田を出発して新千歳空港に着いた我々(山本、原)は、札幌にて志賀さん、そして旭川にて安斉さんと加藤さんと合流した後、宿のある上川町に入った。日が暮れるまで、どこかで地衣を探そうということになり、町の北西にある「エスポワールの鐘」のある丘へ向かった。上川町を見下ろせるこの丘の上には、鐘のついた展望台があり、そこから大雪の山々を望むことが

できる。しかし我々の視線は近くの木々の幹にある地衣類である。ここでは思ったより多くの種類の地衣類を観察することができ、翌日からの観察会に対する期待が高まった。宿に戻り、秋本さんと吉村会長の参加者全員がそろったところで、翌日の観察ルートの検討を行った。初日は沢沿いの登山ルートを進むことだけが決定事項で、目的地は特に設定しなかった。観察や撮影をしながら進むため、地図に表記されている所要時間など全く目安にもならず、目的地を設定できるはずもないのではあるが。

翌日から天候は下り坂に向かうということであった。午前8時半には愛山溪温泉のある登山口へ到着し、早速

歩き出した。悪天候とヒグマには無縁であることを祈りつつ、。

10分も進むと、大木の根元にツメゴケとウラムゴケの仲間が見つかった。各自、入れ替わり立ち替わり、撮影が始まった。続いて、所々の岩上にはカムリゴケやセンニンゴケをよく見かけることができた。ある大きな岩では、カムリゴケとツブキゴケが互いに領地を拡げるため、短い擬子柄をいっぱい立ててせめぎ合っていた。このツブキゴケは、先に進むほど擬子柄が長くなっているように感じたが、気のせいだったのだろうか。さらに、ウスバカブトゴケ (*Lobaria linata*) の群落や、木の幹に現れるコナハイマツゴケ (*Vulpicida pinastri*)、マキバエイランタイ (*Cetraria laevigata*, Fig. 1) などを観察しながら進んでいった。やがて、正面に紅葉の間に挟まれた昇天の滝を望むことができた (Fig. 2)。さらに進み、村雨の滝の右手から滝の上まで登りきったところで、お昼の休憩をとった。約400mの高低差を3時間半かけて登ったこの地点は、東は永山岳までの登り道、西は沼の平への道、そして北は愛山溪温泉へ引き返す道の分岐点である。昼食後、我々は東と北の二手に分かれることにした。

東のコースでは、ウスキエイランタイ (*Flavocetraria cucullata*) とコガネエイランタイ (*F. nivalis*) を必死に探したが見つかることができなかった。しかし、ナギナタゴケ (*Cladonia maxima*) を見たのは初めてで、その大きさに驚いてしまった。この場所からは、西側の沼の平が一望でき、そちらでの観察も惹かれたが、一時間ほどで再び北の道に戻り、撮影し直したりしながら午後3時過ぎには無事下山した。

札幌での植物学会の準備のため、吉村・山本両氏とは上川駅にて別れた。翌日も観察の予定がある我々は、疲れをとるべく、層雲峡の温泉「黒岳の湯」で汗を流した。もちろん、宿に帰ってから北海道のワインやビールで水



Fig. 1. マキバエイランタイの撮影会。



Fig. 2. 昇天の滝と紅葉を見ながら進む。

分の補給も欠かさなかった。

26日午前5時前、ミッシ、ミッシ、ミッシ、と最終日の朝は地震とともに訪れた。この揺れで目が覚め、神戸の地震のことを思い出しながら、いつまで続くのか、揺れがどうなるのか、布団の中でただただ心配していた。



Fig. 3. 雲井ヶ原湿原.

幸いにも、しばらくして揺れが収まったため、すっかり安心してまた眠ってしまい、6時頃の余震にも目が覚めなかった。

この日の観察は、愛山溪温泉の北側の雲井ヶ原湿原と温泉までの道路沿いのどこかよさそうな場所とした。まずは、昨日と同じルートで愛山溪温泉まで行き、そこから雲井ヶ原湿原を目指した。愛山溪温泉から雲井ヶ原湿原までは、大木に囲まれた登山道を歩いていった。途中の切り株の上のウゲイスゴケ (*Cladonia gracilis*) にちょうど光が射しており、早速、撮影会が始まった。さらに登っていくと、森から抜け、目の前が開けて、景

色が一変した。霧の中、アカエゾマツがボツンボツンと湿原にまばらに立っており、幽玄な雰囲気を出していた。その枝や幹には、ホネキノリの仲間がたくさん着生していた (Fig. 3)。木道を進みきったところで、雨が降ってきたので、戻ることにした。

続いて、車に乗り込み、各自、窓の外の地衣や観察に適したポイントを探しながら、ゆっくり進んだ。途中、サルオガセの仲間を見つけたり、カブトゴケの仲間を車中から観察したりして、なかなか前に進まなかったが、下草の少ないポイントを見つけ、ようやく観察を開始した。そこでは、ちょうど目の高さの位置に、センシゴケ

(*Menegazzia terebrata*) とフクレセンシゴケ (*M. asahinae*)、アンチゴケ (*Anzia opuntiella*) とアンチゴケモドキ (*A. colpota*) がそれぞれ隣り合わせて着生しており、これらの地衣類の観察に非常に適した場所であった。もっと時間があれば、と去り難かったが、泣く泣く出発した。上川町はラーメン日本一の町ということであったので、最後に名物のラーメンを食して観察会を締めくくった。

(原 光二郎：秋田県立大学生物資源科学部)

Lichenology 日本地衣学会ニュースレター とも、投稿先は：

原田 浩・〒260-8682千葉市中央区青葉町955-2
千葉県立中央博物館・Fax 043-266-2481.
E-mail: h.hrd3@mc.pref.chiba.jp

(原田浩：編集委員長)

複写される方へ

本誌に掲載された著作物を複写したい方は、許諾を受けてください。詳細は本誌13号46ページに。

Notice about photocopying

In order to photocopy any work from this publication,

you or your organization must obtain permission. For details, see no. 13, p. 46 of this publication.

日本地衣学会ニュースレター 27号

発行日：2003年11月10日

編集：原田浩・岡本達哉・木下靖浩・棚橋孝雄
発行者・発行所：日本地衣学会

〒010-0195 秋田市下新城中野

秋田県立大学生物資源科学部生物生産科学科内